

「日本文化の語り方＝パリ編」

拙著「日本文化を語る」淡交社版から抜粋

元パリ日本文化会館館長

竹内佐和子

(1) 日本文化の語り部を探す

文化の多様性を是とするフランスでは、日本文化の「独自性」は何ですかとよく聞かれた。特に、私の友人たちには、エコール・ノルマル・スーペリウール（高等師範学校、サルトルが出た名門校、Ecole Normale Supérieure）の哲学の主任教授や、日本文化研究者が多いので、通り一遍の日本文化の紹介を語ったのではかえってばかにされる。独自性＝「アイデンティティ」を徹底的に説明することがまず第一歩だ。

そういう必要性に迫られ、論理的、哲学的なセンスあふれる語り手を探してみた。

そこで、語りのプロとして注目したのは、熊倉功夫さんと、松岡正剛さんだった。このお二人の語り方は海外から見たときに卓越している。

熊倉さんは2014年ころ、パリ日本文化会館で、「茶室」のしつらえを使って、日本文化の総合的演出と自然の取り入れ方をテーマに講演した。熊倉さんは、茶道表千家の顧問で、徳川初期の寛永文化の専門家である。特に、松岡さんの熊倉功夫著「後水尾院」についての論評が理解のきっかけを提供してくれた。その件（くだり）はこうである。

話は、寛永元年（1624年）から始まる。そのときに活躍していた文化人には、板倉勝重、本阿弥光悦、三斎細川忠興、伊達政宗、沢庵宗彭、柳生但馬守宗旦、千宗旦、小堀遠州、春日局、林羅山、宮本武蔵、楽家初代長十郎、金森宗和がいて、そして朝廷側は後水尾天皇29歳、そして幕府側は21歳の徳川家光がリーダーという豪華な配役である。

ストーリーをおおつかみにすると、その頃、政治的ヒエラルキーを確立しようとする徳川家と、政治の権威と距離を保とうとする朝廷の二大対立が鮮明化していた。将軍家は支配確立のために「公武合体」をもくろみ、寛永の行幸（二条城行幸）の準備を着々と進めていた。二条城行幸とは、1626年（寛永3年）9月、天皇が御所を出て、将軍の居城である二条城まで、移動することである。二条城にて能や和歌などの会が賑々しく催された。

他方、後水尾天皇は、二条城行幸により、天皇の権威が弱まることを予測し、早々と退位を決意する。他方、文化力で朝廷の地位を高めようと、官中では、立花（今でいうところの池の坊）や、文人を集めて洛中サロン＝寛永の文化サロンを主宰し、修学院離宮も建設した。これらの活動により、安土桃山時代から築かれた日本の文化遺産が結集され、一層「雅」なものへと昇華されることになった。

徳川側の二条城でも、城の拡張計画が進み、茶の湯文化をリードする建築の巨匠小堀遠州を指名して作庭、天守閣や行幸御殿、本丸御殿などが造営された。襖には狩野派のきらびやかな障壁画が描かれた。鹿苑寺（銀閣寺）では、茶人の金森宗和、千宗且などを招いてサロンを開催した。寛永の時代は、朝廷（禁中）と将軍家（二条城）の間で、日本文化を演出するハイレベルな文化合戦が行われていたのである。

この文化合戦のおかげで、日本の美意識と知性がせめぎ合い、琳派など日本のデザインの潮流を作り出した。こういう歴史の裏側に気が付かせてくれた熊倉さんと松岡さんの語りに勇気づけられ、その後、日本を語るシリーズに奮闘することになった。

（2）日本文化を語るための参考書さがし

次の課題は、参考書探しである。2015年の正月休みにフランスから帰国していた私は、NHKの正月特集番組、「100分でわかる日本人論」に聞き入った。海外でぼっかりあいた知的空白を埋めてくれる内容だった。4人の文化人が、それぞれ一冊の本を選んで日本文化を解説する企画だった。出演者は、松岡正剛「いきの構造。九鬼周三」、赤坂真理「死者の書。折口信夫」、斎藤環「中空構造 日本の深層。河合隼雄」、中沢新一「日本的靈性。鈴木大拙」だった。

早速、これらの図書を購入し、パリに戻ってからむさぼるように読んだ。その結果、日本の知性には一種の思考パターン、というか、構造があることに気が付いた。

この隠れた型を見つけるため、松岡正剛さんには実際に何度もあって「日本という方法論」について議論を重ねた。そこで話題になったのは、1960年代にフランスの思想家たちで、アンドレ・マルロー、レヴィ・ストロース、メルロ・ポンティなどが日本の古典からキーワードを抽出していた。「空間」や「間」と無常観、千利休に始まる茶の湯道具の「非対称性、手ひねり」の美、本居宣長の「もののあはれ」、和辻哲郎の「風土」、河合隼雄の「中空構造」、女房文学の「源氏物語」などがそれだった。

その後、私は文部科学省顧問に就任し、「日本文化の特徴だし」を任されたことがきっかけで、日本文化の語りたい人やプロデューサーのための簡潔な解説書をつくることにした。

【注1】谷崎潤一郎 「陰影礼賛」のポイント

「闇」を取り入れる。「塗り物について、漆器というと、野暮くさい、雅味のないものにされてしまっているが、それは一つには、採光や照明の設備がもたらした「明るさ」のせいではないであろうか。事実、「闇」を条件に入れなければ漆器の美しさは考えられない。漆器の肌は、幾重もの「闇」が堆積した色である。」

【注2】和辻哲郎 日本精神史研究、「もののあわれ」

「もののあわれ」とは「見るもの、聞くもの、ふるる事に、心の感じて出る、嘆息の声」であり、、、、感ずるとは「よき事にまれ、あしき事にまれ、心の動きて、あゝはれと思はるゝこと。」である。「もの」は意味と物とのすべてを含んだ一般的な、限定せられざる「もの」である。「個々のものの中に働きつつ、個々のものの中に働きつつ、個々のものをその根源に引く。我々はその根源をしらぬということと、その根源が我々を引くということは別事である。「もののあはれ」とは畢竟この永遠の根源への思慕でな

くてはならぬ。」。「物のあはれ」は、世間的人情であり、寛い humane な感情であり、誇張感傷を脱した純な深い感情である。

【注3】 アンドレ・マルロー

ドゴール時代の文化大臣（1959年から1969年）。無常(*precaire*)を理解。民族の文化に対するイメージの解説法を発信。「真の日本は浮世絵ではなく藤原隆信の肖像画と琵琶の曲にある」。竹本忠雄さんと対話本で、鈴木大拙から桑原武夫、小松清から川端康成、久松真一から岡本太郎まで、日本とフランスをつなぐ知識の結びつきを説く。「日本とは、連綿たる一個の超越性」 (*une transcendance*) と認識した。

【注4】 不完全性の美学と無常観

ものあはれ論と並んで日本の哲学の基礎をなすのが「無」や「無常観」である。「無常」は「永遠」の裏返し、「無」は「有」の裏返し。鴨長明「方丈記」、冒頭の文。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある、人と栖と、またかくのごとし」。これが無常観、うつろいである。老荘思想の「無為」とはあきらかに異なる。

「空白」とか「無」というのは「無い」ことではない。書の世界では、空海が「呼吸」、雪舟は水墨画で「のび縮みする空間」を入れた。構成のなかの空白によって、不完全性の美学を確立していくプロセスである。松林図屏風（長谷川等伯）などにも通じる。

岡倉天心の表現によれば、不完全性の美学とは、「故意になにか立てておかずに、想像のちからでこれを完成させることである。【間】とは、対構造の中のテンションであり、二つの片方を両方含む状態」である。不完全とは、欠けていることではない。

「茶の本」で天心はこう続ける。「茶道の要義は『不完全なもの』を崇拝するにある。いわゆる人生というこの不可解なものの中に、何か可能なものを成就しようとするやさしさである。宇宙に対するわれわれの比例感を定義する。それはあらゆるこの道の信者を趣味上の貴族にして、東洋民主主義の真精神を表わしている」。

【注5】 旅人の文学と美意識

旅人による文化は、花鳥風月の原点である。出家した人々による「数奇」と「無常」観は、西行や芭蕉の生き方に一つの意識構造を見出す。定住型社会とは別に「旅人のように放浪する美学」は日本文化の価値観の底流にある。また見ん交野の御野の桜狩り、花の雪散る春のあけぼの」西行

(3) 「日本の文化」の対構造から、日本文化の基本構造を抽出する

日本文化の理解にはまず対の構造があることを認識する必要がある。縄文と弥生、狩猟と農耕、公家と武家、天皇と将軍、仏教と神道、という具合である。神仏習合は、仏教や神道の二つを融合するプロセスであり、外来宗教である仏教と、土着の信仰、地蔵菩薩や不動尊、民話、庶民信仰が、もう一つの「対」の構造を成す。庶民信仰の形は、埴輪、円空、白隠、大津絵、説話、物語、風俗画、妖怪画の中に見て取れる。

こういった独特の文化表現は、平安時代に書かれた「風土記」などにもあり、各地方で何層にもわたって蓄積（多層性）されている。こういった記憶の糸口を頼りに、大づかみに日本文化の特徴を引き出し、つなぎ合わせてみることで、日本文化の特徴がくっきりと浮き上がってきた。そうして、つくった解説が以下である。

縄文文化と弥生文化

縄文文化と弥生文化は、日本文化の基層を形作る。特に、縄文文化¹は、梅原猛、柳田国男、折口信夫らが指摘するように、日本の文化芸術を一万年にわたって引っ張った。「緑の文明」と称され、樹木文化（建築物、樹皮の利用）、堅果類（ドングリ、トチ、クリ）の利用と管理方法に特徴があり、その痕跡は東北に多く残っている。

神々の世界、山の神、アニミズム、シャーマニズムの世界ともつながっている。そういう神々との境目が「結界」である。結界は、悪霊を追い払い、日常人間界と非日常神界が呪術的なレベルで交流する場で、山中他界ともいわれる。土器などに流水文、水や風などの文様が描かれるのは悪霊払いという意味がある。

弥生文化は、農耕文化・文明が進化したあとの文明で、支配者弥生人（アマテラスオオカミ）が登場し、被支配人の縄文人（すさのおのみこと）が一時期、併存した。弥生文化の中心である稲作文明では共同作業が重視されたので、その後の日本人論に、集団志向が強いという特徴が強調されるようになった。しかし、縄文文化をみるとそうとは言えない。

縄文の神々と神話の神々、邪気払い

縄文の叙述には、山の神、田の神、異世界からやってきた精霊、山人、邪気などがよく登場する。日本のアニメの原点である。ハレとケ、聖と俗、シメナワ、鳥居、豊穰を願う祭りにも聖俗を区別する概念がある。

外からの来訪者をお迎えするまればと¹信仰、自然崇拝、精霊崇拝（アニミズム）も同じで、神をお迎えする宮（御屋）と都（宮の庭）、斎庭（いつきの庭）といった場所の設定根拠もここにある。神事の空間設定とも関係する。

¹時を定めて他界から来訪する霊的もしくは神の本質的存在を定義する^[1]折口学の用語。折口信夫の思想体系を

奈良時代に編纂された古事記や日本書紀は、日本誕生の物語を示したものである。西洋でいうところの神話に相当する。そこには、イザナギ（伊耶那岐）、イザナミ（伊耶那美）や、風・木・山・海・川・岩・石・火にまつわる神々が登場する。火の神は、溶岩、噴火、温泉を恵み、火の神の仕業でイザナミは絶命してしまうが、そのあとイザナギによって、アマテラス（天照大神）が産まれる。アマテラスは太陽を神格化した（女性）神で、伊勢神宮に祀られ、皇室の御祖先として崇められている。古事記の神話は、日本の天皇制の源流であり、ギリシャ神話との関連を想起させるところがある。

河合隼雄は「中空構造日本の深層」のなかで、神話的知をこう説く。

「神話の知は、言語化しがたいもろもろのもの、特に反対物さえ内包するものとしてのメタファーである。人間がこの世に生きるためには、個々人にふさわしいメタファーの発見と、その獲得を必要とする。ところが現代の管理的な社会機構によって、メタファーは全体の構成からだんだんと排除されつつある」。

神話の中心にあるアマテラスは太陽を意味する。西欧では、男性—太陽—精神—能動、女性—月—肉体—受動といった軸があるが、日本の神話では、逆で、女性—太陽、男性—月である。アマテラスは父親の左の眼から、ツクヨミは右の眼からでて、均衡している。

日本という「国」の誕生、「漢風」から「和風」への転換

飛鳥・奈良から平安時代に、日本という国家意識が形成された。古事記や日本書紀などの記紀の編纂をきっかけに、日本という「国」の意識が芽生え、国名も倭国から日本国へ変更された。507年には継体天皇（天皇のルーツ）が出現、日本書紀の神話をもとに、天皇制が国の中心になり、大社などの整備が進んだ。

九州にある宗像大社や、伊勢神宮などは神の大きな「すみか」であり、そこに、農業・漁業の信仰が加わって、神社がますます増えて、現状八万社ほどあるといわれる。これが、日本人のいう「神様」の形を成す。

神社の増設と並んで、天武、天智天皇時代から国号の制定が始まり、天皇制が日本の国の骨格をなすようになった。聖徳太子の17条憲法を皮切りに、仏教による国造り、律令制による中央集権国家の形ができあがった。冠位十二階、太政官制などが、古代官僚制の骨格を成す。

美術、建築分野では、遠くギリシャ、ペルシャ、ユーラシアの文明に加えて、ヒンズー教やインドの仏教、中国の世界観が入り込み、アジア的価値観が日本に入った。天皇制と並んで、中国伝来の仏教が普及し、仏教建築、特に、巨木を活用した大型建造物・大仏の建立をきっかけにアジアとの外交関係が広がり、国内では、大仏信仰が地方へ拡散していった。これをみる

考える上でもっとも重要な鍵概念の一つであり、日本人の信仰・他界観念を探るための手がかりとして民俗学上重視される。

と、日本文化が、中近東の文明、インド、中国文明との強いつながりをもっていたことがわかる。

平安時代になると、中国文化やアジア文化と距離を置いて、国風文化へと舵を切った。きっかけは、894年の菅原道真の提案による遣唐使の廃止で、平安中期には、文学、絵画、食の面で、和風化が進んだ。

仮名文字の発明、漢字から仮名へ

和風化の一步は、伝達革命である。奈良時代以前から導入された漢字は、古事記、日本書紀などの編集²に大きく貢献したが、新しい文字、「平安かな」（平仮名）が加わった。物語と絵巻が合体した絵巻物も登場し、伝達力は飛躍的に向上した。絵巻物に登場する挿絵は、浮世絵、漫画、アニメの原点になった。

伝達革命により、口伝、口承は、「文字伝達」に変わった。漢字は、一字で多義的内容を解釈する認識方法にもなり、国境を越えた伝達ができるようになった。

こういった文字革命は、文学の世界で大きな足跡を残した。女房文学では、「平安かな」を自由に使いこなし、宮廷の教師役として仕えた女房達が活躍した。紫式部は源氏物語、清少納言は枕草紙などの名作を残し、みやび、うつろい、無常観、「もののあはれ」といった情感を文字に残した。この伝達革命により、「おきな=老翁」による伝承型「カタリ」から、記録型のかたまりが主流になり、女房物語の全盛期を迎えた（紫式部の源氏物語、清少納言の枕草紙、三十六歌仙、古今和歌集、新古今和歌集など）。

ものがたり、もののあはれ

女房文学あたりから、「ものがたり」や「もののけ」の追求が始まった。「ものがたり」の「もの」とは「物」でもなく「霊」でもない。物質と精神の「もの」が混然一体に混じったものである。「もののけ」は、ものの気配のことで、人間に憑（つ）いて苦しめ、病気にさせたり、死に至らせたりする怨霊、死霊、生霊や、妖怪が含まれる。

松岡正剛は、平安王朝の『源氏』物語は、人々を外から支配していた古代的な「もの」が、平安期に「人に憑くもの」に変質したことを示すプロセスだといい、本居宣長は「もの」とは「ものいう、物語、物まうで、物見、物いみなど、広くつかわれるようになった添え語」で、

² *『古事記』（8世紀始め）、天武天皇の命で稗田阿礼が「誦習」していた『帝皇日継』（天皇の系、推古天皇まで）と『先代旧辞』（古い伝承、神話や伝説）。本文は変体漢文、漢文で代用しづらいものは一字一音表記。歌謡はすべて一字一音表記。*『日本書紀』。神代から持統天皇の時代まで。政治有力者が主導。*『万葉集』（760年ごろ）、万葉文化、寄物陳思（物だけを表面的に歌って思いを表現する）。短い和歌で、表現する。最小限の言葉で表現する。万葉かな。

「もののあはれ」とは「見るもの、聞くもの、ふるる事に、心の感じて出る、嘆息の声」【宣長全集 5】だとする。

要するに、「もののあはれ」とは、恋愛、人情などを超えて、誇張や感傷を脱した純な深い愛情や、永遠を思慕する普遍性を含む。つかの間の時間と永遠の時間とが共存している。これは日本独特のものだと思われるが、西欧の普遍性 (catholique) やヒューマニズムにも対置できる哲学なのではないかと私には思われる。

仏教と仏教美、空海と最澄、極楽浄土、禅宗、

最澄と空海により中国の唐から導入された仏教は、天台宗と真言密教というという形で、日本の仏教文化を築く。大日如来を中心とする宇宙認識、曼荼羅が、仏像、壁画、建築を通じて、今日まで日本文化の構造を支えている。最澄は、仏はどこにでも存在するという思想山川草木悉皆成仏 (さんせんそうもくしっかいじょうぶつ)、「悉皆仏性」という思想にいっき、やがて、土着信仰 (神祇信仰) と重なっていった。

宇治の平等院、岩手県平泉の中尊寺金色堂などは、阿弥陀如来を中心とする「極楽浄土」の思想、「山中他界」が都に降りたという仏教思想をよく反映している。

鎌倉時代、栄西、道元によりもたらされた禅宗は、日本文化を大きく変容させ、日本文化の基底を作り変えていった。「思惟」「瞑想」による「無」の自覚は、茶の湯、水墨画、五山文学などの新しい日本文化を築き、日本哲学の基礎になった。のちに鈴木大拙が著した「日本的靈性」とするこの本は、日本の哲学を世界にアピールするようになった。

民衆信仰と結びついた神仏習合、本地垂迹 (ほんじすいじゃく) 思想の流れも重要である。神道集 (中世、南北朝時代-14世紀) は、神社を祀る「神道論的」なものと、八百万の神々が化身として権現 (ごんげん) する「垂迹縁起的なもの」がくっついたもので、室町期の御伽 (おとぎ) 草子、江戸期の浄瑠璃へと発展した。

祭り = 大衆文化、浄瑠璃、歌舞伎

お祭りは、古くから神々が地上に降りてくるための儀式の一つだった。お花見は、神々を村人が里でお迎えする行事だった。農耕を基本とする社会では、豊作を祈願し、災いを祓うための歌や舞いが、田楽や猿楽へと発展した。「おきな = 老翁」は、天 (神々) と地をつなぐ存在として、神々に身体性をもたせ、神を地上に下ろす作業を受け持った。

こういった祭りは日本の舞台芸術を生み出した。室町時代には「阿弥」たちのプロ集団が出現し、将軍家に引き立てられ、観阿弥、世阿弥らは「能」という舞台芸術をつくった。「能」には幽玄の美が加わり、死者の世界と生者の世界が行き交う独特の表現を生み出した。他方、歌舞伎は、既存の社会の枠外で変わったことをする「かぶく」という意味の人たちで、文化のプロ集団を意味した。

サムライ、武家文化の登場；平安末期から鎌倉時代

平安末期から鎌倉時代に移る頃、王朝文化は武家文化へと転換した。中世の武士の登場は、日本史を大きく書き換え、武家という存在によって、古代アニミズムは解体され、侍の道理、リアリズムが前面に押し出された。鎌倉以降に形成されたサムライ社会の封建道徳は、忠孝、「いざかまくら」など、権威ある人々への忠誠心や秩序感を作り出した。

滅私奉公という主従関係が縦の権力関係を作り出し、武士の論理が幕府の中心になり、天皇制を中心とする朝廷と幕府の対立という構図が出来上がった。貨幣の流通が始まり、銅山開発が加速、モノの流通が拡大し、取引や輸送、流通を牛耳る商業集団が力を持ち始めた。

商人勢力の拡大：室町から安土桃山時代

室町時代、足利義政の東山文化を経て、商人の勢力は拡大し、楽市楽座を主導し、海外との交易を拡大した。縦社会の枠組みを超える交易網を駆使して、自由都市、自治都市を形成した。南蛮渡来の文化、鉄砲・大砲、キリスト教を取り入れ、日本文化を世界とつないだ。室町時代の「座」は、西欧のルネッサンスを生み出したフィレンツェの「職人組合」とやや似ている。

文化面でも、商人たちは、文化革新の主役だった。京都では、堺の商人だった千利休が、高価な唐物（中国からの輸入品）の品々を茶の湯に取り入れ、豊臣秀吉の時代に政治の舞台に進出した。当時の茶碗は左右対称の天目茶碗などが主流だったが、陶工の長次郎に手捏ね（てづくね）の茶碗の創作と依頼したことをきっかけに、手づくりの感覚を重視した日本美を追及するようになった。こういう「侘び」茶のほうは待庵に代表されるような草庵茶室を好み、独特の審美眼を作り出した。「月は照るよりも雲隠れするほうが情緒がある。枯れているほうがいい」というような考え方で、禅宗の影響も見られる。

他方、客をもてなすために、床や書院に名物や唐物など高価なものを荘って（かざりと読む）楽しむ、サロン文化＝喫茶文化も発達した。こういった寄り合いは、歌合わせ、色合わせ、言葉合わせ、香合わせなどの王朝風の遊び方につながる。宇多天皇の宮廷サロンは有名である。

朝廷と武家：二大勢力の対立

江戸時代には、平和な時代が始まり、日本文化は円熟した美意識の形を極めていく。江戸城が完成（1639）した頃には、江戸幕府が幕府と藩による中央集権的な武家政権を築く。人もモノも江戸に集中し巨大な市場が出現した。これ以降、徳川将軍家による江戸の文化と、天皇・公家中心の京文化の二つの軸が拮抗し、影響し合いながら、日本文化を変容させていった。

京都を中心とする上方では、豊かな豪商と公家による文化ルネッサンスが進んだ。幕府は朝廷向けに京都所司代を置いて統制を強めたが、公家と町衆が手を携えて、円熟した文化を引っ張った。本阿弥光悦、俵屋宗達、尾形光琳などが、王朝風のやまと絵に文様を加えた琳派のデザインを確立し、日本文化の独創性は頂点に達した。

江戸では、江戸城を中心とした都市づくりが進み、歌舞伎の中村座が創設され、西鶴、近松などの演目が上演された。江戸の「いき」「通」といった言葉とともに、江戸のスタイルが、浅草周辺で定着していった。江戸の人口は拡大、食の市場も急激に拡大し、大衆文化をリードする江戸錦絵や、浮世絵の流通市場も拡大した。

こうして日本文化は、江戸の文化と京文化という二極構造を中心に発展するようになった。どちらも日本の顔であることには変わりはなく、どちらかを強調するよりも、両方の軸から見るほうが、日本文化のダイナミックな姿が見えて面白いだろう。

=====

外国で、日本文化を語るというのは容易なことではない。しかし、語るための方法論やコンセプトをしっかりと持っていれば、語ることは楽しくなる。明治維新後、西欧諸国に追いつけ追い越せという発想が強まり、アジアへの拡張主義が強まった。敗戦後、日本文化の位置づけは難しくなり、経済成長路線を強調するあまり、自国文化のアイデンティティを語るができなくなった。しかし、海外からみると、日本文化の独自性は強みであり、十分に語るべき内容がある。しかし、表層的にだけ、一方通行で語ったのでは、理解にはつながらない。この草稿が、そういった語りたい人たちの参考になれば幸いです。
